

サッカー指導者

佐々木 則夫さん

2011年(平成23年)、東日本大震災による惨状から日本中が暗く沈んだ状態にある中、佐々木則夫監督率いるサッカー女子日本代表(なでしこジャパン)による女子ワールドカップ・ドイツ大会優勝という快挙は希望の光となり、多くの国民を勇気づけたことはいまだ私たちの記憶に鮮明に残っています。

現在、リオデジャネイロ五輪・アジア最終予選に挑む佐々木監督に、女子サッカーのトレンドや国際大会の裏話、監督がライフワークとして取り組まれている被災地支援事業、サッカー普及事業などについてうかがってきました。

(聞き手・構成：水落一隆，志賀 晃，高橋辰三)

*このインタビューは2015年(平成27年)10月に収録されたものです。



——本日はよろしくお願ひします。早速なでしこジャパンという女性のチームを率いて素晴らしい成果を上げられている点についてお伺ひしたいと思います。まず、監督は女子代表に関わる前に男性チームも指導されたこともあるようですが、男性のチームと女性のチームの最も違うと感じる点はどこでしょうか。

異性であるところ。

——ああ、なるほど。監督からご覧になって異性ということですね。

そうですね。男性だったらそんなに気を遣わなくてもいいところを女性に対しては気を遣うといったことはありますけれども、それは妙な気の遣い方をすることではないですね。

たまたまうちの娘もサッカーをやっていたんですよ。それで、娘の高校のキャンプで2～3日指導したことがあったんですね。そのときに娘に「意外にパパは人気があったよ」と。

僕が女子サッカーの指導者になるときも、娘から「パパならいいかもよ、あんまりかっこつけないでパパ

らしくやればいいんじゃない」と言われたことはすごく自信になりましたね。とにかく自分というものを出してやってみて、それで何か問題があったときは自分が修正するのか、選手間で考えて修正してもらおうという形でアプローチすればいいのではと思ひやってきました。それが自分らしさになっていると思ひます。

——そういった形で女性の指導を始められて、異性であること故の壁というようなものを感じた、ということはありませんか。

男性だと、何か相談も深いことができるかもしれない、対応することもできないことはないと思ひますよ。じゃあ、今度個人的に飲んで、食事をするとかいうのはできますけれども、女性に対してはやっぱりそういうことはできないということですね。そのぐらいの壁ですよ。

どうしても男性って女性と対応するときに何かちょっと、鎧を着たくなっちゃうでしょう。「何かいいことをやってやろう」とかね。そんなことを思ったら絶対駄目なので。それは何で知ったかという、大学卒業

後に就職したところが電電公社で、最初の配属先が女性8割、男性2割の職場だったんですよ。ちょっとしたことがこんなに大きくなって噂になるんだというのもあって、少し恐ろしさは感じていたと思うんです。でも、別に自分らしくやっていけばいいのだと学ばせてもらいました。

——でも、まあ、そのような場所であったからこそ鍛えられたというか。

はい。鍛えられましたね。

——ちょっと話が横道に逸れますけれども、私たちは東京弁護士会の広報委員会に所属しているんですが、監督もNTTで働いていた頃、広報課に配属になったことがあるそうですね。

よくご存じですね。社内広報をやっていました。

——社内広報のニュースキャスターをされていたそうですね。その経験は今でもなでしこジャパンなどで活かされているんじゃないですか。

はい、学びは大きかったですね。自分が読む原稿はすべて自分で書くのですが、上司にダメ出しされていました。赤ペンで修正がガンガン入り。ただこうして基礎を徹底的に叩き込まれた後は「あとは自分の頭で考えろ」と言われ…。それから不思議と原稿をスラスラと書けるようになりました。広報時代の上司のやり方が、なでしこジャパンの指導をする上で大きなヒントになり、「教えすぎない」「上から目線でモノを言わない」と学ばせてもらったのです。

——ロンドンオリンピックのとき、決勝戦で惜しくも1点差で敗れたにもかかわらず、その後の表彰式で選手たちはすごく明るい表情でみんな手をつないで登場しましたよね。すごくなでしこらしい登場の仕方をして、あれはすごくよかったなと思いました。試合は全力で戦って、敗れたときは悔し涙を流す。でも表彰式ではすごい切り替えて

いるんですね。これは「ピッチの外では明るくやろう」という監督の考えが浸透していることのあらわれじゃないでしょうか。

これは僕の指示じゃなくて、選手同士の話し合いの結果ですね。オリンピックのときは、試合が終わって、1回ベンチに行って、表彰式用のシャツに着替えなきゃならないんですね。それで着替えているときに、みんなすごい大泣きしているんですよ。この雰囲気のまま表彰式に出ていくようであれば何か言わなきゃいけないな、と。

「ここまできて、お前たち、よくやったし、あと、ここに来たいというチームがどれだけ世界にあるか。だからお前ら幸せなんだ、という気持ちで表彰式に出る」とかいう感じで言おうかなと思っていたら、選手たちは自分たちで気持ちを切り替えて、明るく出てきたから、「ああ、流石だな」と思いました。

——これも選手の自主性を尊重するという、監督自身は一步引いた位置に身を置いて、選手同士が積極的に話し合って自分たちを高めていくという方針をずっと続け、その結果、選手たちが自らどんどん色々なことを考え出すようになったことの1つの例ということですね。

そうですね。選手たちの集団的な知性が高まって、それでソーシャルなフットボールのチームになったなというのは感じます。

——今回の2015年カナダ・ワールドカップは、2011年のときのドイツ・ワールドカップと比べて何か違うところはありましたか。

まず、諸外国が変わりましたね。今までの諸外国はちょっとアバウトなサッカースタイルだったんですよ。間延びしているとか、守備も連携してないみたいなのがあったんですけども、今回の大会ではどこの国もチームとしての連携がしっかりしていたり、あとは技術的にも非常に質が高くなってきたということです。

—— 諸外国が日本のなでしこサッカーをずいぶん勉強して、自分たちにも取り入れてきているということですね。

はい。ですから、我々の質が下がったわけではなく、諸外国が今までやってこなかったことをやるようになり、レベルがぐっと上がってきた。我々について言えば、以前サブだった選手が非常に上がってきた。前にレギュラーだった選手と差がなくなって、逆に超すような選手が出てきた。ですから、今回の大会はなでしこは全体的にアベレージは上がった状態でしたね。

ただ、相手はもう以前とはレベルが違いますね。ですから、今回の大会では、以前だったら2点差、3点差で簡単に勝てるような相手でも、今ではもう1点差ぎりぎりの勝利になるだろうなということを踏まえて準備をし、心構えをし、スタッフも選手もその姿勢を一緒に合わせて戦っていました。

—— 本当におっしゃる通り、1対0、2対1、1点差の勝負をしっかり勝ち抜かれて決勝まで進みましたね。

親善試合からずっと全部1点差という結果でしたね。あとは大会の期間が長いので、実際に生活時間も長いわけです。そうしたときに選手間のやはりチームワークの度合い、これがやっぱり一体化しないと駄目なんですよ。コミュニケーションレベル、そしてやはり今までの培ってきた経験と関係です。長いスパンでチームワークを持ってやっていくときには、関係性というところもやはりメンバー選考では最終的には重要になってきました。

それで、僕は表現としては、「この長いスパンの中で戦えるメンバーを選考しました」という表現をしました。

—— 今度、リオデジャネイロオリンピックのアジア最終予選という大きな山場が来ますが、オリンピック予選の方がむしろワールドカップ本選より厳しい戦いじゃないかなと思うんですが、まずはやっぱりオリンピック出場とい

う結果を出さないといけないという使命がある一方で、世代交代の必要もある。そのあたりのバランス、匙加減についてはどのようにお考えになっていらっしゃるのかと。

代表というのは結果というものがやはり大きいと思うんです。

ただ、今回のワールドカップ、オリンピックを経験している選手がやはり次のワールドカップ、東京オリンピックで軸となるということが理想だと思いますが、もう少し若い選手が今回しっかりと経験を積んでおくということは重要だとは思いますが。

でも、ある程度のサッカーをこういうふうに行うという共通の要素をみんな分かってきてくれているんですよ。あとは経験と、チームとしての関連性ですよ。ピッチだけではなくて、やっぱりピッチ以外にもいろいろ、なでしこジャパンというのが一体になれるかどうかという要素があるので、この辺をやはり加味した中で経験をしているということは、すぐく組みやすくなってきている現実があるので、それは僕自身リオ五輪にチャレンジするときは、そういったところをチャレンジして何とか結果も出して、次にバトンを渡せればなと思っています。

—— 監督のウェブサイトを見ますと、被災地支援事業、女子サッカー普及事業、子供教育事業という3つのライフビジョンが掲げられていますが、まず、被災地支援事業というものを始められたきっかけというのはどのようなものですか。

本当に2011年のドイツ大会で戦っているとき、準備しているときもそうでしたけど、やっぱりあんな東日本大震災の大変な状況の中で、何とか自分たちのパフォーマンスで元気を伝えたいという思いでモチベーションがとても上がったということがあります。開幕直後の頃はあまり期待はされていませんでしたが、あれよあれよという間に勝ち進んでいるときに、国民の皆さんから、特に被災地の方々からもメッセージを多くいただき、我々もまたさらに元気が出たり

したということがあったんですよ。そういったことで逆に僕も何とか個人的に恩返しができないかなということやらせていただいています。

—— 具体的には、被災地でサッカークリニックを開かれていますよね。

はい。クリニックをやったり、クリニックでボールを贈呈したり、あと、AEDの使用を小学生に実際に体験してもらっています。学校にAEDの機械自体はあっても、授業などでAEDの使い方を実習しているというところは少ないので。あと、AEDって値段が高いんですよ。だから、もう少し国が援助して少年団ごとに1個ずつ備えられるようにならないかな、と切に考えています。

またサッカーを通じて何かを学んでほしい。僕もずっとやってきた中で、サッカーというものは人間の形成にもつながってくることはもう間違いないので是非、そういったところも含めて、サッカーを続けてほしいなということもあります。

—— 監督は最近、「のりさんガールズ&レディースサッカーフェスティバル2015」というものを開催されたそうですが、これは3つのライブビジョンのうちの女子サッカー普及事業、子供教育事業関連のイベントですよね。

それは、本当に日本の少女、女性にサッカーって競技はすごい適しているスポーツだと僕は思うわけです。ですから、そういう意味でも、ぜひ女の子がサッカーをできる環境づくりというのはもちろん日本サッカー協会もやらなきゃいけない。各県の協会もやらなきゃいけない。そして、大人たちも目を向けてあげなきゃいけない。決して女子のチームをつくるだけじゃなくて、少年団のチームに女子を導いてあげるということは絶対必要なんですよ。

それと、サッカーが好きだという女の子たちに、サッカーができる環境がないからやめるんじゃなくて何とかサッカーを続けてほしい、と。続けていれば身近

にチームができる、もしくはそこに導いてくれる大人が出てくるということもあるので、何とか続けてほしい。そういうことで女子サッカーの啓蒙活動をしているのが今なんですよ。

他にも、子供向けにキャンプというものもやっています。このキャンプでは首都圏の子供は僕の故郷山形へ行くのです。山村交流ですね。大自然に触れ、サッカーを楽しんでもらい、あとは大部屋で男女別々に布団を並べて寝るのです。なかなか体験できないんですよ。これがいちい経験になります。いろいろな事を自身で学んでもらいます。そういう経験をやっぱりさせるということが重要ですね。本当にお互い見ず知らずの子供たちが集まってきて3泊するという、その緊張感というものもあるしね。

—— こういった事業は、学校の先生になるという昔からの夢を今実現されているという感じなのでしょうか。

そうですね。いや、夢というよりも、僕が好きなんですよ。子供たちと触れて「どうだ!」とか言うのがね。自分が一番楽しんでいるんですよ!

プロフィール ささき・のりお

1958年生まれ。山形県出身。帝京高等学校、明治大学を経て、日本電信電話公社に入社。高校生(3年次に主将としてインターハイ優勝)、大学生、社会人時代(電電関東サッカー部/NTT関東サッカー部(現・大宮アルディージャ))には選手として活躍。現役引退後、NTT関東サッカー部/大宮アルディージャ監督、サッカー女子日本代表(なでしこジャパン)コーチ等を経て、2007年なでしこジャパン監督に就任。その後、2011年サッカー女子ワールドカップ・ドイツ大会優勝、2012年ロンドン五輪女子サッカー・準優勝、2015年サッカー女子ワールドカップ・カナダ大会準優勝といった輝かしい成績を収め、2011年には国民栄誉賞、国際サッカー連盟(FIFA)女子年間最優秀監督賞受賞。著書に「なでしこ力さあ、一緒に世界一になろう!」(講談社)、「なでしこ力 次へ」(講談社)、「勝つ組織」(山本昌邦氏との共著 角川ONEテーマ21)。オフィシャルウェブサイト <http://junon.co.jp/>